
不死の戦場

オーバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死の戦場

【Nコード】

N9229H

【作者名】

オーバー

【あらすじ】

今は戦争の真っ只中ある戦場ではもう戦いが終わろうとしていたレッド軍が優勢でリプレ兵を殺すことはできたが・・・肉体は滅びる事はなかった・・・終わると思っていたこの戦いは終わらないそれと同時に主人公は悟った「戦場は不死なんだ」と

第1戦「人vs人」(前書き)

これはいわゆるゾンビがでてきます。

それを倒すシーンがいくつもでてきますので苦手な方は注意してください

第1戦「人vs人」

レッド兵「手榴弾投擲！！」

リプレ兵「撃て撃てええ！！！！」

そこにはある廃墟の街での戦場

毎日何人も犠牲者がでてその死体はそのまま・・・

だがまだ勝敗はついていない・・・しかし明らかにレッド軍の方が優勢である

レッド軍第2小隊長のアレンは最後のトドメを任されていた

第2小隊のメンバーはこの戦いの当時は24人で現在は16人になっていた

いくら優勢といっても100人以上を相手にしてきて犠牲はあった隊長のアレンはムードメーカーのような存在で厳しく優しくもあるいわゆる頼りになる隊長である。

アレン「もう残る敵は広場に陣取る40人程度の敵奇襲をかければ犠牲を出さずに勝てることができる！だが油断はするな！リプレ兵の一番の脅威は兵ではなく兵器にある！気をつける！」

レッド軍はそれを一番恐れていた

以前コーニル軍がリプレ兵を全滅させた時兵器によってコーニル軍は毒に侵されほとんどの兵が死んでしまった。その時の兵器は壊したがまた新たな兵器をだしてくるかもしれないとそう踏んでいたアレン「もうすぐ予定の時間だ！進むぞ！」

第2小隊は進んだその少し前に第1小隊・第3小隊・第8小隊が集まっている

ブロック「もうすぐ広場につきます位置の確認を」

副隊長のブロックは小隊の陣取り役をまかされていた

広場に堂々と陣取っているリプレ兵その周囲には4つの建物があるブロック「4つの建物に2人計8人潜入するそして右に4人左に4人手榴弾と共に突撃する建物の窓付近におそらく爆弾が仕掛けてあ

るのでそれを解除すること」

ブロックは昔でいうと軍師並の知能をもっているアレンにはない能力だ

アレン「よし！準備！」

静かに素早く小隊は行動した

ブロックの読みどおり窓付近に紐状の爆弾が仕掛けられていた

それを避け窓を覗いた

テントがいくつもありどうやら食料を食べているようだ

ブロックは建物の中にいた

ブロック「まさに絶好の機会！手榴弾用意・・・」

トランシーバーで伝えた

ブロック「手榴弾投擲！」

一斉に手榴弾が放たれた

リプレ兵は驚きとともにパニック状態になった

テントは燃え隊長が落ち着けと大声で叫んでいた

そして知らない間にアレンを含んだ8人の兵士がマシンガンの銃撃を浴びせていた

本当に油断していたらしくリプレ兵は抵抗もせず崩れ落ちた

隊長もマシンガンの餌食になり数分で全滅した。

アレン「よし！勝ったぞ！！！」

第2小隊はおたけびをあげた

アレン「こちら第2小隊リプレ兵を全滅させた急いでそちらに戻る」

まだ兵器があるかもしれないそこからもし兵器があれば小隊全員で壊しにかかる予定だった

だが今回の敵は兵器だけではなかった・・・

第2小隊はレッド軍の陣まで戻っていた

アレン「これで次はリプレ軍の本拠地に攻め入ったら戦争が終わるな」

ブロック「いままでそのような事をいついて油断をしないで下さい
いってましたですが今回はうれしいかぎりです」

本拠地といつても陣はせまく100人程度の兵だと予想されている
やはりアレン達も平和は望んでいるのだ兵士達はほつとしていた
だが戦場は死にはしなかった戦場は戦う事を選んだのだ
その瞬間遠くみえるリブレ軍本拠地からなにやら巨大な弾が打ち込
まれた

それはリブレ軍の陣に直撃し紫の煙がたちこめた

だがアレン達はもうその場所からかなり遠くにいて被害にあうこと
はなかった

アレン「今回は毒も意味なしだな！うれしい限りだ」

ブロック「そうですがいままでと何か違うようなガスでしたね・・・
強力なんですかね」

アレン「とりあえず早く立ち去るか」

アレン達はいそいでレッド軍の陣取る場所まで移動した。

レッド軍本拠地

レッド元帥「第2小隊アレン少将ご苦労であつた毒ガス弾は回避で
きたようで良かった」

この戦いが終われば中将に昇格は間違いない

アレン「そのお言葉幸せでございます！」

他の小隊長も集まっていた

レッド元帥「三日間はここに滞在しその後残党がいたら捕虜か殲滅
し数カ月後本拠地を占領する」

小隊長達「はっ！」

レッド元帥は50歳にしてレッド軍の総大将まで登りつめた「不死
の兵」^{ツクモ}の異名をもつ

アースラ「おまえの所の兵は精鋭だな」

アレンに話しかけてきた

アースラは第1小隊長で中将で「武器のスペシャリスト」とも言
われる、技術がずばぬけて優れている。

アレン「お前もあらゆる武器を使えるじゃないか」

アースラ「おまえは接近戦でも生き残るうらやましいものだ」

アレンは近距離での戦闘が上手く接近戦は命知らずのものがやる戦い方だ

その後アレンは第2小隊に戻りテントに入った

アレンはその後のことをはなしブロックに中将昇格濃厚の事も話した
ブロック「もうすぐでしばらく称号も意味もないものになりますね」

アレン「そうだな・・・でもいずれは他の敵と戦うことになるだろう」

ある意味この勘はあっていた・・・ある意味・・・

アレン達は寝た明日も早い

明日からが本番なのも知らずに・・・

第2戦「人vsゾンビ」

朝5時突然第5小隊から連絡がきたどうやら何者かの奇襲にあったようだリプレ兵の復

讐だと思ったがその連絡以降音沙汰なしだった

第5小隊といえばレッド軍の先頭に陣取っているその2キロ先に我々第2小隊がいる

アレン「我々に即座に連絡するという事は速急に応援にきてくれという事に違いない
すぐにいくぞ」

アレンは元帥に連絡した。

レッド元帥「戦地についたら状況を報告しろ」

アレン達は一刻もはやくいくため軍用トラック2台で出動した数分で着いた。

トランシーバーで連絡がきてから30分最悪の事態だった

見たところ全滅している周りは生きているものはおらず死体は傷だらけになっていた

しかも数人いや数体奇襲者らしき死体があった見た目は腐敗していてゾンビのような

感じだった

アレン「まさか全滅とは、」

啞然とした

？

よく見るとテントに何者かが1人いる

ブロック「敵かもしれないから気をつけること！」

隊員が用心してテントにはいった

入ると隊員が固まった

単なる重傷者ではなく敵というのがすぐにわかった

気づいた時にはその敵は無造作に隊員に襲いかかった隊員「うおお

お！」隊員は倒れな

がらハンドガンを発砲した

しかし頭に当たってもひるむ様子はなかった

アレン「あの敵にむけて発砲しろ！」

15人がいつせいに発砲した

だがあれだけ撃つても死なない

しかし動きが鈍くなった

アレン「撃て撃て!!！」

そのまま撃ち続けやつと敵は静止した。

どうやら死んだらしい・・・隊員も

アレン「ライ・・・」

アレンは無残な姿のライに悲しみがこみ上げた

ブロック「あの敵はなんですかね・・・まさか!!!!」

ブロックはハツとした

ブロック「まさか・・・あの敵は死んだはずのリプレ兵では？」

アレン「何故そんなことがいえる？」

ブロック「よくみると敵はまだ衣服をきています腰のところをみる

とタゲが・・・」

ぼろぼろになつていたがついていた間違いなくリプレ兵だ

アレン「信じたくないが生き返つたということだな・・・」

アレンは元帥にありのままの事を報告した

レッド元帥「なんだと!!信じられないがおまえのいうことに偽り

はないだろう」

おそらくこのまま放っておけばその敵は厄介になるな・・・わかつ

た全小隊に特命を出す

全ての敵を排除しろとこの私も動くかもしれん・・・」

レッド元帥が特命を出すとすることは逆らつてはいけないというこ

とである

逃げ出したりしたら巡回のものが捕らえるであろう。

アレン「ともかく特命を出された以上敵を倒さなくてはならないそ

して生き残らなければならない」

ブロック「とりあえずゾンビと戦うことになるがこれまでに書物でみたゾンビのイメージとは遙かに違うひとつは生命力の高さだ50発以上撃たなければならぬふたつめは行動力のはやさだおそう所をみるとかなり運動能力があるらしいそして一番の脅威が最低限の知能はあるということだ予想ではあるがテントの中で待っていてそれを狙い襲うという能力だ」

アレン「とりあえず一旦ここにとどまる」

こうしてアレン達は再び戦場に身を投じることとなった

攻あれど守なし

第5小隊副隊長デマスは逃げ回っていた

デマス「多分生き残りは俺だけか」

すぐさま元帥の下にいかなければ、とそう感じていた

いきなりあんなにゾンビが襲ってくるなんて誰かがパニックになってそれが連鎖して・・・

もう頭の中がいつぱいだった。

とにかくゾンビは強かった頭を何発撃つてやっと死ぬくらいだった、だが効いているのは確かだった。

一人ではあの群れを倒すことはできない殺されてしまう。

武器はライフルと手榴弾しかないので走って戻ることにした。

一方アレン達は話し合っていた

この小隊には優れた知能を持つブロックがいる。

ブロック「まず敵について一番知りたいことは感染するかどうかである、おそらくリプレ兵が放った弾はウイルス弾であると予想される、おそらく感染はするが今この状況をみて空気感染はしないと見た」

アレン「ともかく相手は200人はいる頭のいい方法ではないと全滅してしまう」

ブロック「我々の軍は強靱で攻撃的な軍だが智は得ていない、どうしたらいいものか」

普通の軍はリーダーを後ろに置き死に安い前衛を兵卒に置くがレッド軍は優れているものを前へ置くという戦法である。

攻撃的な考えなせいか逃げる者は最悪殺される

ブロック「やはり建物だな」

ブロックの考えは建物の上から狙うという作戦で全員が建物に入り殲滅していくというものだ

ブロック「だがどの建物にするかそして探索して敵がいなか確かめなくてはならない」

アムソル「建物ならマークタワーがいいと思います」

マークタワーとは10年前に軍事目的として立てられた10階建てのビルだ

もちろんリプレのだがその近くになぜか元々閉鎖されているコンビニがある

ブロック「そこなら弾薬もあるし多少の食料もあるなアムソルの案にしよう」

アムソルは地に詳しくこの戦場のどこに何があるか把握している。

戦場で勝利するための要素が全て整っているのに何故第2小隊なのか第1小隊は別名「無敵の軍隊」といわれ指示されれば必ず失敗することはなかった、だが今回は一発の勝負ではないのでどうなっているか・・・

とにかく我が軍は殲滅を命令したので全部の敵を倒さなくてはならない

普通なら脱出を専念するがいつも犠牲を出しながら戦うレッド軍はあまり恐怖というのは感じなかった

なので今回の作戦で第2小隊の生と死が分けられる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9229h/>

不死の戦場

2010年10月10日00時36分発行